

西周金文通読（稿）

両周金文研究会

序文

本稿は、郭沫若『両周金文辞大系考釈』（以下、『考釈』を略称する）所載の西周金文を通読するものである。テキストには『張政烺批注《両周金文辞大系考釈》』（張政烺著・朱鳳瀚等整理、中華書局、2011年）を用い、つねに『考釈』の増訂本（1957年）を参観した。

両周金文研究会は2012年以来、『張政烺批注《両周金文辞大系考釈》』の講読に取り組んでいる。その過程では、郭理遠「《張政烺批注〈両周金文辞大系考釈〉》的重新整理與初步研究」（復旦大学碩士論文、2014年）におおいに学びつつ、批注の意図や独自性、また張政烺自身の解釈の変化といったことへの理解に力を用いてきた。このたび西周金文についてひとわたり講読を終えたこともあり、現段階における研究会の金文理解を公表することとした。これはまた、張政烺の功績を明らかにするための第一歩でもある。

本場、中国における金文研究は、『考釈』以前にも呉大澂・孫詒讓・陳介祺・呉式芬・羅振玉・王国維らの研究があり、郭沫若の活動期間から1980年代までにも陳夢家『西周銅器断代』・于省吾『雙劍詒吉金文選』・唐蘭『西周青銅器銘文分代史徵』・馬承源『商周青銅器銘文選』といった著作がある。

他方、日本における金文通読は、白川静『金文通釈』『金文集』『続金文集』などに結実しているが、容易に参照できるものとしては、

- ・平凡社『書道全集』第1巻・中国1（1954年）、第26巻・中国15（1967年）
- ・平凡社『中国書道全集』第1巻（1988年）
- ・二玄社『中国法書選』第1巻（1990年）
- ・天来書院『シリーズ書の古典』第1巻（2021年）

といった書道関係の図書くらいしかない。

『考釈』は金文研究の最初の一里塚であるが、初学者にとって必ずしも最適な書籍ではない。『考釈』を通読しても銘文の内容をじゅうぶんに理解できないことのほうが多いからである。そこで、『考釈』所載の西周金文について、わたくしたち研究会の理解を王輝『商周金文』のようなスタイルで公表し、中国古代史研究ならびに関連研究の進展にいくばくかの貢献をしようと思い立った。したがって、斯界によくみられる訳注の形式はとらない。また個々の銘文について先行研究を網羅的に紹介しようとするものでもない。

参照した主要文献は以下のとおりである。

- ・李学勤『青銅器与古代史』聯経（2005年）
- ・王輝『商周金文』文物出版社（2006年）
- ・劉翔ら『商周古文字読本（増補本）』商務印書館（2017年）
- ・凡国棟編著『金文読本』鳳凰出版社（2017年）
- ・侯乃峰編『甲骨文金文導讀』山東大学出版社（2023年）

ほかに『殷周金文集成』のような大型著録や文献目録、『金文編』のような工具書・字書類も利用しているが、ここにはあげない。

なお、この序文・凡例は常用漢字を使用しているが、通読については正字を主とした。釈文に用いた記号は以下のとおり。

[] …補足 () …説明・読み替え □…一字空白 ▣…字数不明の空白

1、大豊殷（天亡殷、『集成』4261、国家博物館蔵）



“天亡”青銅簋（中国国家博物館 HP）より引用
https://www.chnmuseum.cn/zp/zpml/csp/202008/t20200826_247369.shtml

【出土】

馬承源（以下、『銘文選』と記す）は「1844年陝西省岐山県出土」（14頁）といい、王輝（以下、『商周金文』と記す）は「清同光末年宣誓岐山県礼村出土」（34頁）という。

【時代】

郭沫若（以下、『考釈』と記す）は「武王が文王を殷祀した時に、冓（祭事）に勤仕した臣工が作った器である」といい、武王期の作器とする。張政娘（以下、『批注』と記す）は見解を示していない。現在では利殷とともに克殷からあまり時間が経っていないころの作器とすることが多い。

これに対し、白川静（以下、『通釈』と記す）は、周知のように、殷滌非「試論“大豊殷”的年代」（『文物』1960-5）の所説に拠って銘文の「不克三」を「丕競王」と読み、「丕顯王」を武王に、「丕肆王」を成王に、「丕競王」を康王に比定して、康王期の作器とする。また、家井真は『詩』形成史の観点から本銘を四章からなる詩体と考え、「詩としての内容、展開から見ると、詩としての完成度はかなり高く、〔現行『詩経』の〕雅の諸篇を髣髴とさせるものがある」ことから、「郭沫若は武王期の器とするが、白川静が康王期の作器とするが正しい」という。ただし、「丕顯王」を文王、「丕肆王」を武王、「丕競王」を成王とみなすところは、白川説と異なる（『『詩経』の原義的研究』研文出版、2004年、26頁～28頁）。王の比定は家井説に従う。

【器制】

周錫鞞「天亡簋應為康王時器」（『古文字研究』第24輯、中国古文字研究会、中華書局、2002年）を参照。

【釋文】

𠄎亥、王又（有）大豊⁽¹⁾。王^𠄎三方⁽²⁾。王
祀^𠄎天室⁽³⁾、降。天亡又（佑）王⁽⁴⁾、
衣（卒）祀^𠄎王⁽⁵⁾。不（丕）顯考文王⁽⁶⁾、
事喜上帝⁽⁷⁾。文王^𠄎才（在）上⁽⁸⁾。不（丕）

顯王乍(作)尙⁽⁹⁾、不(丕)絺王乍(作)虜⁽¹⁰⁾、不(丕)克(競)
三(王)衣(卒)王祀⁽¹¹⁾。丁丑、王鄉(饗)大⁽¹²⁾ (宜)⁽¹²⁾。王降
亡助爵⁽¹³⁾、隹朕(朕)
又(有)蔑⁽¹⁴⁾。每(敏) 王休⁽¹⁵⁾ 殳⁽¹⁵⁾ 隣白⁽¹⁵⁾。

【訓読】

乙亥〔の日〕、〔康〕王、大禮有り。王、三方〔の諸侯〕を同む。王、天室に祀り、〔先王の霊を〕降ろす。天亡は王〔の祭祀〕を佑け、祀を王〔宮の祭場〕に〔支障なく〕卒ふ。丕顯なる考文王は上帝に事饗す。〔それ故に〕文王の徳は上に在り。〔かつて〕丕顯なる〔文〕王は省を作し、丕絺なる〔武〕王は虜を作し、丕競なる〔成〕王は〔文王以来の〕王の祀を卒ふ。丁丑〔の日〕、〔康〕王、饗するに大宜もてす。〔康〕王、亡に助爵口囊を降す。隹れ朕く蔑有らん。王の休を隣殳に敏揚せん。

【注】

(1) 大豊について、『考釈』は大豊と隸定し、麥尊の銘文や『周礼』の記載に基づいて「大封」のことであるというが、『批注』は豊ではなく禮であるとし、また醴であるという。『整理稿』は張説を支持して「張氏が豊を改めて禮とするのは正しい。甲骨文・金文中の豊と豊との区別については、林漢「豊豊辨」（『林漢學術文集』4～7頁、中国大百科全書出版社、1988年）を参照」と述べる。また、高久由美「豊豊二字辨」（『県立新潟女子短期大学研究紀要』第44号、2007年）がある。白川静『字統』は、豊について「常用漢字が「豊」。『説文』五上に「〔食器である〕豆の豊満なる者なり」とある。食器の豆の中にキビなどを盛って入れた形」（820頁）と述べ、豊について「醴（あま酒）のことで、「禮」の初文。『説文』一上に「神に事えて福を致す所以なり」とある。醴酒を用いて行ふ饗醴」（931頁）と述べる。大豊とは大禮であり、大規模な饗醴の謂いであろう。

(2) 𠄎について、『考釈』は凡と隸定し「風の仮借で、諷することであり、告げること」であり、「三方」とは南・東・北のことであるという。『批注』は𠄎を同と解釈することもできるとし、『周礼』春官宗伯の「殷見するを同と曰う」を引き、さらに『説文』（卷七・冂部）の「合會するなり」を引く。王が三方の諸侯と会同の儀礼を行ったと解するのであろう。郭理遠（以下、『重新整理』と記す）も「甲骨・金文中の凡・同の字形にははっきりとした違いがあり、この字は同であって凡ではない」（72頁）という。『批注』に従って、王が大禮に際し三方の諸侯をあつめたと解することにする。

(3) 殳は于の古字。『批注』は、陳介祺『簠齋藏古冊目並題記』の「殳は於の古字であろう。後世、弓を方に誤り、于を令に誤ったのである」を引く。『考釈』は天室を天亡の室（祭場）とするが、『銘文選』は「明堂中の重層の建物」という。大（太）室と読むこともあるが、文字どおり天室でよい。天を祀る祭祀を行う建物であろう。

(4) 天亡は器主の名である。『批注』は郭沫若の旧説「天は王を尤する無し」を支持して「やはり〔亡又は〕「尤する亡し」と読むべきである。他器にも同類の語は乏しくない」というが、ここの又は祐（たすける）の意でよい。

(5) 衣祀について、『考釈』は孫詒讓・王国維に従って殷祀の意味（大祭）と音（いんし）で読む。「衣

祀于王」についてまず注目すべきは、上文の「王祀于天室」のように、王の前に介詞の于が位置していることである。したがって、この王は現王の謂いではなく、天室と同じような祭祀を行う場所あるいは建物であると考えるべきではない。『通釈』が令彝（『集成』9901）の「用牲于王」を参考にしてこの王字を「王所の意である」というのはまことに卓見であると思うが、祭祀場所（宗教施設）の謂いとしてはなお不分明である。さしあたり王宮内の祭場と考えておく。次に衣字について、西周金文の衣・卒は字体が非常に似ていて、この二字が明確に書き分けられるのは、下図のように戦国早期に衣字の下に左下に払う一画を加えるようになってからである。したがって「衣(殷)祀」（大祭の意）ではなく、「卒祀」（まつりをおえる意）と読むとよいだろう。

図：金文の卒字



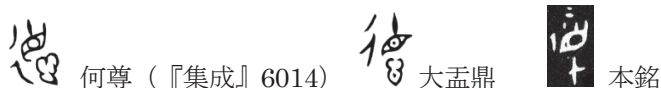
なお、ここの于を與（ともに）と同義の連詞あるいは介詞とし、「殷祀于王」を天亡が王を助けてともに大祭を行ったとする解釈もあるが、本銘以外の西周早期の銘文にそのような用例はないようである。また、親征に従軍したこと記す金文では、征や伐といった動詞の前に「従王」が位置することからしても、動詞（殷祀）の後に位置する「于王」を「王とともに」と読むのは適当でないように思う。

(6) 丕頭は先王に冠し先王を頌美する語。考は一般に亡き父をいう。したがって、「考文王」とあることが本器を武王期のものとする有力な根拠となっているが、考を先人の汎称とする異説もあり、いまこの説に従う。「丕頭考」なる表現は、近年紹介された賸殷（呉鎮烽『商周青銅器銘文暨図像集成』編号 5386、上海古籍出版社、2012年。ただし偽銘説あり）にも「丕頭考翼（恭）王」と見える。「丕頭」の語は後文の(9)にも「丕頭王」と見え、この王をも文王とするか、そうではなく武王とするかで解釈がわかれている。ちなみに、『通釈』もいうように、大孟鼎（『集成』2837、康王期）では「丕頭玟王受天有大命、在珷王嗣玟作邦」といって、文王にのみ「丕頭」の語を冠する。また「丕頭考文王」の語は、『尚書』召誥にも「惟乃丕頭考文王、克明德慎罰」と見える。

(7) 事喜について、『考釈』は「喜は熹の省文で^{さいりょう}柴饗（天を祀る）と同意であろう」というが、『批注』のように饗と解すべきである。饗とは神（ここでは上帝）におつかえすること。文王がよく上帝におつかえしたことをいう。

(8) 「文王」の下の子画について、『考釈』は監と釈字するが、『批注』はその上部を徳字の残文（徳）と考えるようである。監字でないことはたしかである。いま『批注』に従い、下図の残画そのものを徳字と考える。

図：西周早期の徳字



(9) 𠄎について、『考釈』は省と隸定し「古文の相である。省と釈すものもいるが正しくない」という。いまは省と釈字する。省の字義は、王自身が（あるいは臣下が王命を奉じて）視察して回ることであるが、本銘の「作省」は実際に文王が省したということではなく、文王の威徳が周辺の部族にだんだんと及んだ（波

及した)ことを喩えた表現であろう。

(10) 緇は肆と通ずる。りっぱである意。虜について、『考釈』は「凡に従い庚の声の字であろう。凡は古文の盤である。思うに湯の古文で、唐と一字であろう」という。ひろい・おおきい意と考えるのであろう。「丕顯王作省」と「丕緇王作虜」とは対句であるから、作虜も作省に類する王の行為に関わるものでなければならぬ。『考釈』がいうように虜字は「凡に従い庚の声」であると考えるので、『銘文選』が「確証はないが庚字の繁体であろう」とし、武王は文王の事業を継承したと解するのに従う。

(11) 衣王を『考釈』は殷王とする。また『増訂本』は、三について「上文の「三方」の^三と異なる。^三は三画ともに長さが等しいが、この字は中画だけが短い。陳夢家が乞と釈するのに従うべきである。乞は訖の音と意味で読み、やめる意である」という。すなわち、「三衣王祀」を「訖殷王祀」と読み、周の王はこののち殷王の祭祀を取りやめたと考えるのである。これに対し、「不克三」を「丕競王」と読み、「丕顯王」を文王、「丕肆王」を武王、「丕競王」を成王とみなし、かつ、衣字ではなく卒字と考える立場からすれば、「丕競王卒王祀」とは文王・武王が行ってきた祭祀を成王が完結させたの意に読みたい。すなわち、成王は克殷後の政治的混乱をひとまず治め周王の治世を軌道に乗せたと回顧しているのであろう。

(12) 丁丑(干支14番)の日は、乙亥(干支12番)の日の2日後。^𠄎について、『考釈』は宜と釈字し、妥適(適切である)の意であるという。『批注』は祖と釈字して、「大^𠄎」とは太祖のことであるという。「王は太祖を饗した」と解するのである。これに対し『重新整理』は、本銘の^𠄎は宜字であって俎(祖の借字)ではないという。従うべきである。^𠄎が宜字であるとして、問題となるのはその字義である。『考釈』は、宜には①肴(名詞)、②妥適(形容詞)、③社を祭って戦勝を祈る(動詞)、④国名(固有名詞)の意があり、上述のように本銘の宜は妥適の意というのであるから、「王の饗祀はまことに適切なものであった」と解しているのであろう。『通釈』は饗も宜も祭儀であるといい、『字通』では「宜とは肉を殺いで俎上に載せ、これを以て祀ることで、その祭儀をいう」と説く。いまのところ、西周金文に「大宜」の語があらわれるのは本銘のみである。そこで試みに、宜を肴の意にとり、「康王は大ごちそうで饗宴をおこなった」と解してみた。

(13) 助字はいまのところ本銘にしか見えない。『考釈』は賀と読む。『批注』は「王降亡助」を一句とし、助について『説文』卷十三・力部の「勛は、^{えい}勞るるなり」を引く。「降」という行為を終えても、王は疲れることがなかったと解しているのかもしれない。『考釈』は「^𠄎𠄎」の二字を賀爵(さかずき)の対句と考えて復觶(つのさかずき)と読むが、賀・復の品詞・意味をどのように考えているのかはわからない。『商周金文』はこの二字を退囊と読み、「王降亡助爵退囊」の句を「王は天亡に助爵・退囊を降^{たま}わった」と解するようである。ただし「助爵」「退囊」の意味はわからないという。ちなみに、本銘の^𠄎に類似する字形は、いまのところ下に挙げたように西周晩期まで見えないようである。



豊罍(西周晩期、『集成』4469)



本銘

なお、凡国棟(以下、『金文読本』と記す)は、退囊とは復囊であり、二重の袋のことであるという。

(14) 朕は駿に通じ、ながくの意。蔑の原銘は下図のようである。『考釈』は慶と隸定し、『批注』は慶に

改めるが、すでに早く于省吾が蔑と积字するのが正しい。『銘文選』『商周金文』『金文読本』などの积文も、明記してはいないが、于省吾の説に従う。ほまれの謂いであろう。

図：西周早期の蔑字



(15) 𠄎について、『考釈』は𠄎と隸定し揚と読むが、残画そのものは下図の西周早期の字形に似る。であれば𠄎を構成要素とする字であるかもしれないが、よくわからない。さしあたり『考釈』に従って揚と読み、敏揚を一語と考えておく。白について、『考釈』は「かつては皂と考えたが、あるいは𠄎・殷であるかもしれない。原銘は明らかに白字である」という。『批注』は皂と考え、「下がやや欠けている」のであって「殷である」という。従うべきである。



【日本語訳】

乙亥の日、王は大礼を挙行し、三方の諸侯と朝見する。王は天室において祭祀を行い、先王の霊を降ろす。天亡は王の祭祀を助け、王宮の祭場において祭祀を支障なく終える。偉大な祖先、文王は上帝によくお仕えした。文王の徳は上帝のもとにある。偉大な文王の威徳が周辺の部族に及び、英明な武王は文王を継承し、立派な成王は文武の祭祀を完成させた。丁丑の日、康王は盛大なご馳走で饗宴を行った。康王は天亡に珍奇な礼器を授けた。天亡とその一族はこのことを長くほまれとし、周王の恩徳を器に記し顕彰する。

【著録】

『従古』15.8 『攷古』三之一.72 『小校』8.60.2 『三代』9.13.2 『通考』344 『断代』 『史徴』
『白川』1 『銘文選』23 『集成』8.4261 『商周金文』6 『金文読本』7

【略称】

『考釈』＝郭沫若『兩周金文辞大系考釈』文求堂、1935年（『増訂本』科学出版社、1958年）

『批注』＝張政烺著・朱鳳瀚等整理『張政烺批注《兩周金文辞大系考釈》』中華書局、2011年

『重新整理』＝郭理遠「《張政烺批注《兩周金文辞大系考釋》》的重新整理與初步研究」復旦大学碩士論文、2014年

『通釈』＝『白川静著作集 別卷 金文通釈』平凡社、2004年～2006年

【近時主要研究】

○李学勤「“天亡”簋試釈及有関推測」（『中国史研究』2009年第4期、後に『三代文明研究』所収）
→ “天亡”簋是最著名的古代青銅器之一。由新作讀釈、推知該器作于克商后不久、銘文所記是武王祀天与文王的大禮、器主名退、当為朝中樂官。成王五年時何尊銘中所叙武王告天、可能与簋銘為一事。

○馮時「天亡簋銘文補論」（李学勤主編『出土文献』第1輯、中西書局、2010年）

○高島敏夫「《天亡殷》私考—殷周革命論ノート(1)—」（『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第7号、2013年）

○田率「天亡簋銘文積義補苴」（『中国国家博物館館刊』2019年第10期）

→本文吸收了前賢時彥對天亡簋銘文研究的成果、對銘文進行了逐字逐句的疏解。“天室”的天不能讀為大、天室指嵩山、前一個“降”字意為降階而下、這一動作反映出君主在外祭祀需築台的情形。“王祀于天室”與何尊銘文中的“廷告于天”性質相同、系武王克商後將天命稟復上帝的典儀。“衣祀于王”記載的是武王出征隨行載廟主以祭祀文王的史實。“甞（笙）”“庸（鏞）”是王在祭祀禮儀中演奏的樂器、“作笙”“作鏞”是上古祭祀文化·禮樂制度的生動注腳。作者對“王降、亡助爵·退·奠”一句的認識提出了新見、意為武王悅服、賞賜天亡銅爵·軛（內轡）·一囊貝。天亡簋作器者為天亡、稱呼文王為“丕顛考”、表明他是周文王之子。

○裘錫圭「大豐（禮）簋銘新釋」（『中華文史論叢』第2期、2023年）